

小泉大塚古墳

大和郡山市、小泉町の出屋敷の近く、県道9号線沿いの丘の上に一つの崩れかけた円墳のような古墳がある。昭和37年の調査で、古墳は葺石や埴輪はないが、全長80mの古式に属する墳形の前方後円墳であることが報告された。

次いで平成8年の檀考研の発掘調査では、墓室は箸墓や天理の黒塚古墳と同じような周囲に石を積み上げた竪穴石室で、2面の内行花文鏡、画文帯神獸鏡を含む7面の鏡、多数の鉄挺、剣などが出土した。そして特筆すべきは、古墳の築造年代が、卑弥呼の墓といわれる桜井の「箸墓古墳」と同じ、古墳時代前期のものと分かったのである。

箸墓が築造された3世紀中葉は、盆地の東南部に突如として巨大古墳が出現した時代、この時代に纏向や柳本以外の地に前方後円墳が築かれるのは珍しいといわれる。古墳の主は卑弥呼の時代に矢田丘陵から小泉を支配した豪族の王であったに違いない。付近の小泉遺跡の船型埴輪や、菩提仙遺跡の製鉄用具や鉄屑の出土品からおそらくは渡来系の高い技術を持った人々の王であったと考えられる。

ところで、古墳の西側には崩れかけた鉄筋住宅棟の県営住宅があるが、古墳の前方部はこの住宅が出来たときに宅地として削平された。今から半世紀前の昭和37年、東京オリンピックの2年前、高度経済成長の始まる時代である。そしてその県営住宅も今は住む人もない廃墟となって古墳の隣に残されている。ここは遠い古代の遺物と、半世紀前の昭和の遺物が共に廃墟となって交錯する、不思議な場所なのです。



小泉大塚と県営住宅 今は前にファミリーマート小泉店がある

